

カーライルの『フランス革命』 におけるルイ十五世の描写

菊 地 裕

序 論

1837年ロンドンで初版を出したトマス・カーライル (Thomas Carlyle) の『フランス革命』(*The French Revolution: A History*) は、『歴史』という副表題を『劇』もしくは『詩』と改めた方が良いとしばしばいわれるほど特異な著作である。歴史とは何かということは、画一的な答えの出そうもない難問題であり、カーライルの *F. R.*¹⁾ が歴史でないと断定するのは早計であるかも知れない。しかしたとえば邦語訳で親まれていた現代フランスの史家マチュエ²⁾ やソブール³⁾ を読んで、面白かった、もしくは教えられる所が多かったという人が、同様の期待をもってカーライルの『歴史』に接するならば、失望するか、少なくともともまどいするであろう。著者のカーライルも、執筆開始の前年に、彼のアドマイアラーであり、熱心な協力者でもあったジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) あての書簡の中で、「フランス革命の正しい歴史(私にいわせるとまず書けそうもないものだが) がもし書けたとすれば、現代の大叙事詩になるだろうとよく思う……」⁴⁾ と、理想の容易に実現できないことを述べると同時に、彼自身のフランス革命史観の一端をひれきしている。

いずれにしても、*F. R.* を何ページかでも読めば、教科書的な、あるいは専門研究書的な歴史とはすこぶる趣を異にしていることが認められよう。本稿筆者としても、カーライルのこの著作の本領は、何よりもまず芸術作品 (work of art) だと考えている。いまこの大作 *F. R.* を組み立てている「パステュー」、「憲法」、「ギロチン」の3巻を劇の3部と見なし、各巻を構成する6乃至7編 (books) を幕 (acts) と考え、各編の要素である50, 54, 39章 (chapters) を場 (scenes) と見たてるとすれば、本書全体は4場から成るプロローグ(第1巻第1編を構成する4章)に導かれる、3部19幕139場仕立ての、散文形式の一大叙事詩劇もしくは史詩的戯曲 (epic-drama) と見なされよう。トマス・ハーディ (Thomas Hardy) がナポレオン戦争に取材した3部19幕133場の大史詩劇『諸元首』(*The Dynasts*) に、部、幕、場の数まで近似してくるのは面白い。というよりは、この十九世紀末の大作家はカーライルから何らかのヒン

トを受けたのであろう。その愛読書中にカーライル全集があったこともあわせ考えると興味がある。(筆者は以前この点に触れたことがある。⁵⁾) この大叙事詩劇『フランス革命』の序詞、もしくは大楽劇の前奏曲、ともいふべき第1編は「ルイ十五世の死」“Death of Louis XV”と題されているが、パスチュー攻略あたりからの革命の本舞台にくらべると軽く見られがちな箇所であるにもかかわらず、思想、文体ともに考えさせるものを豊富に含んでいるので、この機会に十分鑑賞解釈してみたいと思う。

1

フランス革命史の序説または緒論として書かれた物を見ると、約一世紀前に頂点に達した旧体制 *ancien régime* がしだいに衰退してゆく過程が、経済、社会、政治の各方面にわたって、程度の差こそあれ分析的に論述されているのが普通で、とくにスポットライトを当てられる登場人物もなく、この時期の三分の二を生存した国王ルイ十五世も、きわめて断片的に記されていることが多い。たとえば既述のソブールの『フランス革命』では58ページにわたる「序説」の中で、ルイ十五世に関しては、筆者の気づいたかぎり、わずか3行半しか言及していない。⁶⁾ 著者のよって立つ唯物史観からすれば、大小無数のアンシャン・レジームの船舶が百年もの間水上を漂い究極には難破してしまう推移を観察したとき、その中のひとつの船が豪華船であったか、船長の衣食状態はどうであったかなどは、ほとんど一顧の価値もないとされるであろう。より簡潔に革命の原因を解明した実証的史家ポール・ニコルの『フランス革命』⁷⁾ もたぶん当然のことであろうが、ルイ十五世には3行半の記述をしているにすぎない。これらよりは記述も詳細であり、社会経済史的視点に立ちながらも、時代に生きた個人の思想や気質を無視しないマチエのごとき史家となると、十五世に四、五回は触れているが、やはり必要に迫られて最小限度の事項を記した感じが強いのである(一々あげることはしないが)。

これにくらべると、カーライルはルイ十五世を中心として、4章26ページを費やしているから、はるかに多い分量といわなければならない。F. R.にかぎらず、カーライルの書く歴史は、社会の下部構造と観念形態との関係を分析せず、登場人物の性格や業績に焦点を当てすぎて、伝記の集成統合という色彩が濃くなっていると批判されることが多い(かならずしも史的唯物論または類似の立場からでなくとも)。しかし前述の筆者のたとえを再利用するならば、時代の大波が船をどのように運びまた押し流していったかを研究するだけでな

く、個々の船の乗組員、とりわけ船長が、潮流の動きをどう判断して対処したかを観察することは、けっして無意味な個人趣味ではない。社会が個人の意識と行動を方向づける率の多いことは否定できないが、個人が社会の発展変化に促進的あるいに抑制的に働きかけることも、たとえ力はしばしば微弱であっても、同時に見のがせない事実だからである。

2

カーライルによるルイ十五世への言及は、その分量が他著より圧倒的に多いことが目立つばかりではない。叙述の様式が一風変わっているのである。

国王に関する伝記的要素を比較的多く含んでいる内外のフランス史⁸⁾を見ると、1715年5歳で即位してから約7年間のオルレアン公による摂政時代に筆を起し、つづいてルイ十五世による親政時代——ただしブルボン公の首相時代を除くか否かで1726年から始まるとも1723年から始まるとも見られるが、とにかく総体で50年前後にわたる——に記述を進めてゆく。そして枢機卿フルーリの絶対権力のもとで一応の平和と繁栄を楽しみ得た「親政時代」の初めの十数年間、オーストリア継承戦争を始めとして対外戦争に力を出したことが七年戦争(1756—1763)となってインド、カナダを失い、国際間の威信をいちじるしく喪失し、一方ルイの側室ボンパドゥール夫人にその死に至るまで実権を握られ、国民の不満と不信がしだいにのびてきた次の20年あまりの時期、最後の寵妾デュバリー夫人の色香の完全なとりことなり、連年の戦費増大と相変わらずの驕奢な宮廷生活による財政の破綻で、フランス王政が満身創痍となった終局の10年間——どの箇所を比較的詳細に述べるかは別として、だいたいこのような順序で叙述してゆくのが定石である。

ところでカーライルは、大史詩劇の序詞と見なされる第1編を、順序を追ったいわゆるルイの一代記とはしていない。ルイ十五世の死——とくに臨終——に焦点を当て、計4章を使って随時拡大もしくは縮小する手法を取っている。このように特徴的な叙述と描写は、まず各章ごとに紹介した上で鑑賞批判することが、もっとも適切であると思われる。

3

第1章は「深く愛された人ルイ」「Louis the Well-Beloved」と題され、30年前の1744年フランドル攻略の帰途メッス(フランス北東部の都市)で重病にかかり一時は死ぬかと思われたときの状況——この報道にバリエリは、「敵の

強襲を受けた都市のごとく恐怖に包まれ、市内外の教会は哀願のうめきが響きわたり、僧俗のささげる祈禱もその都度すすり泣きによって中断された」それ以来王は「深く愛される人（「最愛王」と訳すこともあろう）‘*Bien-aimé*’の別名がつくようになったこと——が、C. J. F. エノーの『簡約フランス年代史』⁹⁾からの引用を通して冒頭に記されている。

30年後の今日、王はふたたび大病でふしている。だが情勢は何と変わってきたことかと、作者は次のパラグラフで嘆息する。「教会ではもはやあふれるようなうめき声は聞えず、バリーはストイックなくらい静かである。すすり泣きは祈禱を中断しない、そもそも祈りがささげられないのだ。一時間いくらの報酬で行なわれる僧職の祈禱——これは中断されることがない——は相変わらずだが」前節の引用文を巧みに逆用して、1774年の時点における国民一般のうって変わった無関心、冷淡ぶりを描いている。

全国的なこの無感動のただ中で、ともかくも王のため祈ってくれそうな例外的存在として、ルイ晩年の執行部、大法官モーブー、外務大臣デギュイヨン、財務総監テレー司教、そしてこの三頭政治を牛耳った寵妃デュバリー夫人(Dame Dubarry)があげられる。「この面々とその腹心ならば祈るかも知れない——悪魔にでも、その他聞いてくれそうな者にならだれに向かってでも」¹⁰⁾と、カーライルは皮肉っている。

ボンパドゥール夫人に代わって60歳の国王ルイの魂を完全に奪ったデュバリー夫人、国力回復と国交調整に掉尾の力を払った外相ショワズール（著者のいわゆる‘*resolute Choiseul*’）を罷免して愛人のひとりといわれるデギュイヨンを帰り咲かせ、大法官をごきげん取りに明け暮れさせた夫人——「デュバリー魔王国」のこの女王をカーライルは「緋の衣を着た女」(Scarlet-woman)と呼び、本篇中に数回くりかえしている。このたとえば聖書の最終巻「ヨハネ黙示録」(Revelation) 17章の初めに出てくる、紫と赤の衣をまとった大淫婦のイメージであろう。大淫婦とは皇帝礼拝を強要したローマ皇帝のことだとする解釈は議論の余地があるようだが、霊的淫行といえる偶像崇拝の本源となった力をさし、その罪が神のさばきを受けることを予告していることは疑いない。実在のデュバリー夫人がはたしてこのような罪惡の根源であったか、カーライルがそれほど強い断罪の気持で叙述したかは早急に結論はくだせない。持前の誇張癖——著者の文章についてしばしばくだされる批評——が知らず知らずのうちに現われたとも、読者への効果をねらった作文技巧であるとも解釈できないことはない。しかしフランス革命を、外面的な繁栄の美酒に酔いしれて内部

に腐敗を蓄積してきたフランスへの天罰と見なすカーライルの立場が、早くもここに片鱗を示していると、まず見るべきではなからうか。

おおエノー君。祈禱だって。魔術によりつぎつぎと病毒に犯され、いまや大娼婦に首を踏みつけられ、汚辱と苦痛の中に倒れふしているフランスから、どんな祈りが生まれてくるというのだ。……(11)

本章を閉じるに当ってカーライルは、劈頭で引用したエノーに以上のように呼びかけ、王のための祈禱熱のさめきった現状をくりかえし述べている。ソナタ形式における主題の再現にも似たこの手法は、第1章全体に芸術作品として均斉のとれた美しさを与えている(重臣の交替をめぐる過去のエピソードから成る中間部の巧みな扱い方も含めて)。

4

「実現された理想」「Realized Ideals」と題された第2章は、死に近いルイの姿が依然として描かれている。しかし瀕死の状態にあるのはもはやフランス国王個人だけでなく、フランス王政(Kingship)そのものである。世界は変わりつつある。太西洋のかなたでは、「ボストン港は思いもよらず茶で黒くなり」、アメリカ合衆国独立の気運は日一日と燃えあがってくる。

すべてはやがて亡ぶのであり、「時」のスクリーンに写し出される映像にすぎない。にもかかわらず、万物は自らを実在的(real)と思っている。とはいえ、実在化された理念(ひらたくいえば実現された理想と訳されようか)はあることはある。その最重要な現われとして、カーライルは「教会」と「王(制)」をあげ、前者は人間の霊的ガイダンス、後者は世俗的ガイダンスの主体であるとする。教会は別として、王のかかる性格は現代人的感覚では納得ゆかぬかも知れないが、識見、才能がもっともすぐれていると認められた人‘our Acknowledged Strongest’¹²⁾こそ、われわれを導き、われわれから敬愛と信服を受けるにふさわしいのだとカーライルはいう。彼のこの見解はいわゆる出世作『サター・リサーチス』の中にすでに萌芽が現われ、¹³⁾ 4年後の『英雄論』でさらに発展してゆく。¹⁴⁾カーライルの考えの根底には、祭司、預言者、王を神から指導者たるの権威を授けられた者とする、キリスト教における旧約的世界観が横わっていたと思う。(この点については今後さらに掘りさげる必要がある。)当面の問題としてカーライルのいたかったのは、この世的にもっともすぐれた人が王たるべき王制が、教会とともに墮落して、いまではリーダーシップを発揮できなくなっているということである。

教会といえば、ドイツ皇帝を破門し、雪の中に素足で三日間も立たせた昔日の権威は面影ほどもなく、この新参の王権に老衰の身を託すことによって、かろうじて息をついている現状である。霊と心のガイダンスはすでに百科全書 (*Encyclopédies*) や哲学思想 (*Philosophie*) に移っていると、かなり適確な観察がくだされている。

王と教会 (僧侶) について信望を失った存在として著者があげているのは貴族である。「良いにせよ 悪いにせよガイダンスはしなくなったも 同然」 (*have nearly ceased either to guide or misguide [italics added]*)¹⁵⁾ と風刺し、その淫蕩墮落ぶりはおそらく空前だろうといっている。

信仰は立去り、懐疑の到来した時代、国庫はからっぽ同然、窮乏、虚偽、不信仰が国内にみなぎっている状況下にルイ十五世は死を待っているとの叙述で、間もなく第2章は結ばれるのである。

5

第3章は「臨終の聖餐」“*Vaticum*”。題からだけではローマカトリック教徒のルイが死ぬ前に教会規定の臨終の礼典——塗油と聖餐 (いわゆる聖体拝領) にあずかった光景が描かれていると考えがちであるが、そうではない。王に聖餐を授けるべきか否かが重臣たちの大問題となったこと、それをめぐって生じたさまざまな疑念、臆測、異論を写して、全章まるまる3ページを費やし、しかも結着点は第4章の3分の2くらいの所でやっと示しているのだから、かなり風変わりである。

本章の異色ぶりを直接味わってもらうために、冗長になる危険は承知で第2節を全訳してみる。

容易ならぬ問題だ。というのはもし聖餐が施されるならば、いな聖餐施行が口にのぼっただけでも、魔女デュバリーは姿を消さなければならないのではあるまいか。ルイが万一なおったとしても二度ともどれそうもない。彼女が消えると、デギュイヨン公一座々もアミダ宮¹⁾の一同も、前に述べたとおり消えて行くはずだ。渾沌はふたたびすべてを呑みつくし、残る物は硫黄²⁾のにおいだけとなろう。しかし一方、王太子派³⁾やショワズール派⁴⁾は何というだろう。いやそれよりも殉教者たる国王⁵⁾自身何というだろうか。病気が極度に悪化して、しかもなお正気を失っていない状態になった場合のことなのだが。いまのところ、王はまだデュバリーの手に接吻している、次の部屋からわかる。だがやがてはどうなることか。医師の容体書、それは命令されたとおりに適当に書いておける。が疾患は「融合性痘瘡」⁶⁾である——ヒソヒソ話によると、ひととき

非常なきりょう 良しだった門番の娘も、これにかかってねているらしい^イ。それにルイ十五世は臨終の聖餐で粗略に扱えるような人物ではないはずだ。王はバルク・オー・セール^リでおとめ達と教理問答をかわし、彼女らと一緒に、そして彼女らのために祈ることを常としたではなかったか。目的はもちろん彼女らに正統派信仰を堅持させるためだ^ヌ。奇妙な事実だ。といって前例のないことではない。人間ほど奇妙な動物はないのだから。

〔筆者注 イ) デュバリーに引回された例の三頭政治の面々。 ロ) イタリアの詩人 Tasso (1544-95) の叙事詩 *Gerusalemme Liberata* 『エルサレム解放』で十字軍の騎士達を誘惑しようとする妖姫 Armida のすみか。デュバリー王国をたとえている。 ハ) 同じ硫黄でもこの 'brimstone' は、地獄を意味する「硫黄の燃える火の池」などに用いられる。 ニ) 後にルイ十六世となる太子の側近。 ホ) 追放されるまで外交関係その他の政務を掌握していたショワズール(既出)の一派。 ヘ) やがて死ぬべき王をさして 'royal martyr' とは皮肉ない方である。 ト) いわゆる天然痘の一種で伝染力強く悪性のもの(種痘のなかった当時)。一度かかるとたいていは免疫になったので、国王が幼少の時かかったのは何かほかの疾患ではなかったかと、侍医たちのささやき合う所が第1章の終わり近くに出ている。 チ) ルイが彼女と関係したため病気がうつったのだともいわれる。 リ) 「鹿の園」ヴェルサイユの一部の地名、またそこにあった邸宅をさす。1755年にルイ十五世が買収。卑賤の生まれの娘たちを侍従が連れてきては、しばらくの間国王を楽しませ、用済みになると、金を与えて退去させるか、だれか気に入った男ができるとそれと結婚させたりした(主として *Larousse, du XX^e Siècle* による)。ヌ) しかもルイ十五世は、'Most Christian King' である(本文 p. 4 に二回出現)。これは歴代フランスの国王のタイトルのひとつであるのだが。〕

以上やや余分に思われるかも知れぬ注をつけたが、それでもなおテキストには 'mysterious' な点がかなり残っていそう。作者は参照した文献として、ブザンヴァルの『回想録』その他を脚注にあげている。王の荒淫ぶりはこれらの書物に記されてあるらしいが、いちじるしく誇張されていることが多いと、今日では考えられているようだ。カーライル自身も、おびたしい参考資料に全面的な信頼を置いたわけではないらしい。彼の文献の扱い方については、C. F. ハロルドの精密な実証的研究の成果を多としなければならない。(たとえば市民のけっ起を描いた「われらに武器を」の一節¹⁶⁾僅々12行あまりを書くのにカーライルは5箇の異なった sources を利用している。これらの材料を巧みに織りなして、「絵画的統一」を持つひとつのパラグラフにまとめあげていることをハロルドは例証している。¹⁷⁾しかもそれらの文献は記述順序、内容、スタイル等に大幅な変化が加えられることが多い。つまりカーライルは、以上のさまざまな資料からヒントを得て、自分でひとつの創作を行なったといっても差

支えないであろう。)これから類推し、数多くの他の作品を通じてうかがわれるカーライルの制作態度と手法をあわせ考えて前掲の聖餐可否のパラグラフを見るならば、たとえ作者のあげた資料を直接調査することをしなくとも、この一節全体は、色もにおいもカーライルのものといって良からう。彼はそれぞれの記録、回想の奥に、ルイの臨終をめぐる展開されるドラマを感得し、それを統合することによって詩としての歴史を書いたのだ。表現にきわめて含みがあふ (pregnant とでもいうべきか)、国王の私生活の単なるばくろとは異なること遠いものである。

6

臨終聖餐の問題は簡単に解決がつかない。聖餐を授ける僧侶側の承諾がなくしては話にならぬ。たとへばバリーの大司教ポーモンは、教会の頼みの綱である例のデュバリー夫人の意を迎える点からも、進んで王に施したかったようだ。しかし輿論の力を考えると、ルイ十五世のように罪に満ちたからだ '*corpus delicti*' に無造作に赦免を宣告して天国の門を開くことが、異端者を迫害することに生涯をかけてきた峻厳な大司教としてできるであろうか。他の僧侶たちは賛否まちまちのようである。

王の病室にはいることが、この悪疾に感染する危険を覚悟しなくてはできない。それやこれやで練達の廷臣たちもとまどいせざるを得ない。炭酸アンモニアを用意して控室に待機している者もおれば、五重の塔から飛びおりる気持ちで病室へは行って行く者もいた。だがこれはひと握りの連中で、大部分は依然逡巡をつづけている。

作者は次の、そして本章最後のパラグラフで、カトリシズムの成れ果て、「至聖者」の象徴が「もっとも卑しい者」のばくちのさいころにまで下落したことをふたたび強調している。カーライルにとって、宗教の墮落とは、それが霊的ガイダンスの力を失って形骸化したことにはかならない。スコットランド流のカルヴィニズムを植えつけられたカーライルが、フランスの国教ともいえるべきローマン・カトリシズムに対して反感をいだいたという観察を、たとえばエメリー・ネフは、作中の他のふたつの例から推してくだしているが、¹⁸⁾この第3章の場合どの程度まで現われているのであろうか。カーライルがプロテスタントであるカルヴィニストであったといっても、彼からもっとも信頼されその伝記を書く材料を生前にすべて貸与されたフルードもいうように、この文豪は「神学ぬきのカルヴィニスト」¹⁹⁾であつたらしく、教会の礼拝にも、いつごろ

からか何年も出席しなかったと記されている。²⁰⁾したがって本章の臨終聖餐の件でも、カルヴィン教会の立場から厳密な教理的批判を行なうのが主眼でなく、王をめぐる僧侶、貴族の動きの中にカトリシズムの無力さ——精神不在、形式墨守の状況を鋭くキャッチしたものを浮彫りにしたかったのである。

臨終に聖餐に施すには、まず病者の罪が許されていなければならぬ（ルイの犯したはずの淫行の罪は小さくない）。本人に過去の罪をざんげさせ、今後ふたたび犯すまじとの決心を確認してから、赦免のしるしとして、聖体を意味するウェーファーを拝領（食べ）させる——こんな煩瑣な受餐資格論や手続き論が、いまにも死ぬかも知れぬ王をめぐるてかわされている。あのからだで無理に告白をさせて死なせて良いかとの異議も出てくる。例のボーモン大司教がついに意を決して王の室へはいろいろとすると、老リシュリュー元帥（有名な大リシュリューの甥の子）は彼を片隅へ呼んで、「国王は神学の一教条のために殺されてはならぬ」と抗議する所が描かれている。

比較的形式的な簡素なプロテスタント教会、とくにカルヴィン派に対してさえその形式面に興味を失ってきているカーライルのことである。ルイ個人の病状についての憂慮よりも、聖餐授与の可否で頭を使っているカトリシズムの一群の動きには、一個の人間としてがまんがならなかったのであろう。病室を徘徊するのは歯をむき出した青白い「死の亡霊」であるとともに、「礼典(Etiquette)の亡霊」であると辛らつに結んでいる。

7

最後の章は「忘れ得ぬ人ルイ」“Louis the Unforgotten”である。いよいよルイの死ぬ場面である。

だれも「死」の好きな者はないが、ルイ十五世は常々「死」に対して「この上もなく王者らしいけんお」(the kingliest abhorrence of Death)をいっていたことが、三つ四つの逸話を材料として語られている。ルイは「死」を話題にすることさえ許さず、墓地などからは目をそむけて通ったという。このような王を、「敵に追いかけられると首を地中に突込み、こちらが見てないのだからと愚かにも安心して、向うから見られていることに気がつかない駝鳥」²¹⁾に作者はたとえている。

しかしこれほど死をきらった専制君主ルイにも、「死」は容赦なく迫ってくる。いかなる城壁も親衛隊も、その侵入を防ぐことはできない。青白い死の王国へ、裸で、王のすべてを取りはずされてはいり、宿命を待つほかはない。

‘there must thou enter, naked, *all unking’d*, and await what is appointed thee!’ (italics added)²²⁾ 瀕死の王の脳裏を駆けめぐる思いは何かとカーライルは想像している。あの世ではたぶん煉獄(カトリック教会でいう)と地獄の火であろう(天国へはすぐはいれそうにない)。

さて過去をふり返えったとき、王の胸中に浮ぶのは、なすべからざるのになした罪の数々ではなかったか、と作者はつづける。衝動的に開始した戦争のために死んだ数十万の兵士の亡霊、前章で触れた、ルイにより貞操を奪われた処女たち(カーライルはルイを、ギリシャ神話に出てくる獅身鷲頭有翼の怪物グリフィンにたとえる)——これらは断末魔のルイを責め悩ませているに違いあるまい。30年前はあれほど「愛された王」であったルイが、いまではこんなにも人気がなくなった原因としてカーライルは、王の犯した個々の罪過よりも、何もしなかったこと、端的にいえば当然の機会に退位するという唯一の賢明な行動を取らなかったことをはっきり指摘している。国王という責任ある立場からしても、このようなルイのあり方は物の道理にそむくとして、カーライルは十五世を「背理の受肉」(Solecism Incarnate)と呼んでいる。「真理の受肉」(Logos Incarnate)としてのイエス・キリストに対比したカーライル一流の風刺的な造語である。「無為の王」‘*Roi Faineant*’ (King Donothing) たるルイの大宰相として実権をふるう者は前例のない、「雲をいただき、炎の息をばく民主主義の怪物 (Spectre of Democracy) ——数えることのできない、全世界をおおいつつある」²³⁾ であるとするのである。これから直ちに連想されるのは、マルクスとエンゲルスによる有名な『共産党宣言』(1848年ロンドンで初版)の冒頭「ひとつの怪物がヨーロッパを徘徊している——共産主義の怪物が」である。「怪物」の原語ドイツ語は‘*Gespenst*’で、サムエル・ムーアの英訳版(1888)ではカーライルの場合と同じ‘*Spectre*’となっている。『宣言』の注解者リヤザノフによれば、マルクスならびにエンゲルス、ことに後者はカーライルをよく読み、立場は異なっている、旧い功績は認めているらしい。²⁴⁾ 封建制度と民主主義の対比に、資本主義と共産主義の対比がパラレルであること、およびキャッチフレーズを見つける達人であるマルクス、エンゲルスのことを考えると、この書き出しはどうもカーライルの *F. R.* の第4章からヒントを得たように筆者には思える。

ともかく作者カーライルにいわせると、「そんなじょそこの無為徒食の徒」‘*private Donothing and Eatall*’ (ディッケンズのしばしば用いる手法)よりもひどい「背理」の一生を送った点で、ルイ十五世は、少なくともここ一、二

代は忘れられぬ人物である。“Louis the Unforgotten”の呼び名は、こうしたマイナスの因子をもととして作者によってつけられている。このあたり一々引用はしないが、カーライルのことばの駆使はすこぶる巧妙で、袋の中の物を思いのままに取り出す名人芸が感ぜられる。

8

懸案の聖餐式が無事施行されたか見届けなくてはならない。

デュバリー王国の支配者デュバリー夫人が外相デグイヨンの馬車に乗って立ち去った翌晩(そしてふたりは歴史の舞台から姿を消すのである)、ルイ王は聴罪師ムードン司教を呼び彼を通じてごんげをなし、自ら進んで臨終の聖体拝領を要求した。その翌朝施物長官のロッシュエーモン枢機卿が来て、最後の聖餐式を行なった。こう書いてしまうと簡単であるが、ディテールの叙述——たとえばルイが僧の到着を待ちかねているさま(そして「元気を出しなさい、ルイ国王、元気の出せるだけ」と著者の励ましのことば)、枢機卿がいよいよ到来して病室にはいり、聖餐式用の器具を取り出してウェーファーをかかげ、無事終了したらしく威儀をつくらせて退出しようとする、例の聴罪師ムードンに袖をつかまれ何やらささやかれたこと、枢機卿がそこで回われ右をして、国王が醜聞の種となった過去のすべての罪を悔い、今後ふたたび犯すまじと決意したことを一同に聞えるように発表したこと、目撃した例の老臣リジュリューが表情を陰悪化させたこと、礼拝堂での僧侶どもの声も潤れそうな長時間の祈禱、しかし天もまっくらになって恐ろしい雷電が起こったさまなど——40行にわたっての描写は精細をきわめている。記事としては数行で済ますこともできる聖餐式の事実が、かくも多くのスペースを使ってヴィヴィッドに描かれ、少しもだれる所のないのは、警嘆に価するアーティストというほかない。臨終の聖礼典が済んでたぶん4日目、全国民がしびれを切らせていたルイはやっと世を去る。しかし死ぬ瞬間の王の表情や動作についての描写はとくになく、次の一文があるだけである。

この5月10日の光はむかつく病床にさしこむ、だがそこでは鈍く気がつかない。窓からのぞく者の目はかすんでいるのだ。水ための車は軸の上をはずれながら動いている。「生命」は疲れきった馬のように、ゴールに向かってあえぎあえぎ歩いて行く。(25)

一読してわかるように、旧約聖書の「伝道の書」(Ecclesiastes) 12章3節乃至7節、老齢と死の到来を象徴的に記した箇所、の自由な引用である。前章末尾にもカーライルは、「伝道の書」の中心テーマともいふべき「空の空、すべ

ては空」を引いている。旧約聖書39巻の中でも、懷疑とえん世思想で異色のある「伝道の書」は、『サター・リサタス』の第2巻に示されたようにかつて同じ悩みに苦しんだカーライル（それはいまなお完全には克服されているとは思えないふしがある）に親近感を持たせ、一身に集めた国民の敬愛がいまや一場の夢となった国王ルイの生涯の終局を伝えるのに、もっとも適切な表現として活用させたのであろう。

だいぶ隔った部屋で待機していた王太子夫妻——やがてルイ十六世とその王妃——の所へ、突然雷のような響きとともに廷臣一同がかけ参じ、「兩陛下万才」と叫ぶ自動的即位の記述をもって、十五世の死去は間接的に示された。新王が王妃もろともひざまずいて涙ながらに神の加護を願い「われら王たるにはなお幼なれば」と祈ったことを記した作者は、自らも「なるほどまだ若すぎる」(Too young indeed) とつけ加えている。²⁶⁾ 即位のときルイ十六世はわずか16歳、それからは失政につぐ失政で、20年後には断頭台上の露と消えたことをほのかに暗示しているかのようである。

葬儀は簡素に行なわれた。納骨堂へ納めるときも、だれひとり泣く者がなかったという。

ルイと、その罪、圧制、汚辱の時代は葬られた。見よ新しい時代の到来を。過去が醜かっただけに、未来は一段と明るいものであろう。²⁷⁾

9

フランス革命全体に対するカーライルの解釈と叙述手法、思想性と芸術性の融合状態は、何といっても全3巻を研究してからでないと完璧に把握することは無理であろう。しかしルイ十五世をひとつの典型とするフランス絶対王政の瓦解を作者が、どう観察し、どう表現したかは、筆者のいわゆるプロローグに相当する最初の4章からだけでも、かなり満足に近い程度までうかがわれると信ずる。

人民に対する国王の関係を、僧侶、そして貴族のそれとともに、カーライルは、羊に対する牧者 'Shepherd' の関係にたとえている。聖書の旧新約にたびたび出てくるイメージであるが、人民を教えるだけでなく、慰め励まし、養う（非常の場合にはわが身をぎせいにさえることがある）責任を果たすという意味で「指導者」ということばよりも血のかよった温かさが感じられる。この人民の牧者が、毛を切り取る目的だけで羊を飼う牧羊者のように、酷使と重税徴収の対象としてのみ人民を扱い、自らの牧者的能力の喪失に気がつかず、

相変わらず奢侈乱淫にふけていたため、国民の信頼と服従はとみに薄れ、これが革命の素地を形成したのであると、カーライルの見解は一貫している。そしてこうした墮落を、もうひとつの、より根源的な面から見ると、道德律法すなわち全能の支配者たる神の意志にさからった報いであるとの解釈が働いていることがわかる。彼のカルヴィニズムは、既述のように、その正統性や純度がしばしば問題となるのであるが、それにもかかわらず、ルイ王政の瓦解を神の審判と見る見方には、ピューリタンのキリスト教体系の、少なくとも切株に当たる部分は残っていると筆者は判断する。

10

最後に、以上4章を読んで印象づけられることのひとつは、カーライルが、ルイ十五世について、非は非として鋭く指摘しながらも、ルイその人に対する憎しみの情を示していないことである。墮落下降の時代に生まれた「あわれなルイ」(our poor Louis)を始めとして、筆者の気がついた範囲でも、第2章から第4章にかけて、‘poor Louis’が5回、‘unhappy man’と、‘miserable man’がおのおの一回づつ出現している。最後のふたつは第4章の第4節に用いられているが、後者を例に取ると、「あわれむべき者よ」と呼びかけてすぐあとに、「きみは能うるかぎりの悪を行なった」ときめつけながら、ただちに「きみの全生涯は『自然』のいまわしい流産であり誤謬ではなかったか。きみの用途と意義はまだ知られていなかったのだ」と同情めいた評言をくだしている。断罪と同情とが、デュエットの的に働きながらひとつの音楽をかなでている感じである。

もうひとつ関連した箇所をあげるならば、臨終のルイへの呼びかけのことばとして、‘Doomed mortal; — for is it not a doom to be Solecism incarnate!’ (italics added)²⁸⁾がある。「背理の受肉」すなわち罪のかたまりは、既述のごとくカーライル作製のルイの異名であるが、そういう人間になること自体が、神のさばきの現われ(a doom)である。しかしそうなることが不可抗的なものだったとしても、それによってそれ以後犯した罪惡への報いから免除されたとはいわないのである。('doomed'を「運が悪い」と訳すと一面的になる恐れがある)。神の側の決定権と、人間の側の自由意志とのかかわり合いを、神学の図式として頭で理解しているのではなく、たとえ不完全であっても皮膚感覚として捕えているところに、カーラルの論述が読むにしたがってヒューマンな感じを与える鍵がひそんでいるようである。

この特色はルイ十五世の描写にかぎらず、すべての人物の叙述について認められると云って差支えないのであるが、たとえば「淫婦」、「妖婦」、「いつわりの魔女」など手きびしい評語を与えている例のデュバリー夫人に対しても、最後に、「なんじ汚れたる、とはいへ邪悪ならぬ、あわれむべき点なきにしもあらぬ者よ」(Thou unclean, yet unmalignant, not unpitiable thing!)²⁹⁾と呼びかけ、その私生児の出生から玉の輿に乗り、最後はギロチンにかけられた波瀾の多い一生に同情の目を注いでいる。さらに他の例を読めばわかるが、こうした場合、「おかawaiiそうに」式のセンチメンタリズムに堕していないこと、同時に断罪が執拗残酷でないことが、芸術作品としての *F. R.* に、案外多くの人の見落している一種の「さわやかさ」を与えていると思うのである。

注

[引用著書の巻数もあわせ示すときは、I, 22 (第1巻22ページの意味) のごとく記す]

- 1) 以下本文および本注において *F. R.* と略記したときはカーライルの『フランス革命』をさす。
 - 2) アルベール・マチュ『フランス大革命』(上・中・下) ねづまさし・市原豊太共訳。(岩波文庫, 1998—59)
 - 3) アルベール・ソブール『フランス革命』(上・下), 小場瀬卓三・渡辺淳共訳。(岩波新書, 1953)
 - 4) *Letters of Thomas Carlyle to John Stuart Mill, John Sterling and Robert Browning*, edited by Alexander Carlyle (London, 1923) p. 71.
 - 5) 菊地裕「芥川竜之介の言及したカーライルの詩的精神」(『青山学院女子短期大学紀要』No. 18, p. 33)
 - 6) ソブール (上), p. 43.
 - 7) ボール・ニコル『フランス革命』金沢誠・山上正太郎共訳。(白水社, 1965) pp. 18—19.
 - 8) 筆者の調べた範囲では,
 - i) 金沢誠『フランス史』(ダヴィッド社, 1956) pp. 158—70.
 - ii) 山上正太郎『フランスの歴史』(白水社, 1959) pp. 101—11.
 - iii) アンドレ・モーロワ『フランス史』(上), 平岡昇・三宅徳嘉・中村真一郎・山上正太郎共訳。(新潮社, 1952) pp. 283—307.
 - 9) Thomas Carlyle: *The French Revolution: A History*, Centenary Edition (Chapman and Hall) 1, 1. カーライルの著作は 4) のごとく特記しないかぎり、この版による。
- なおエノーを引用したことは、カーライルが *F. R.* p. 1 の脚注に記している。
- 10) *F. R.*, I, 2.
 - 11) *F. R.*, I, 5.

- 12) *F. R.*, I, 9.
- 13) Thomas Carlyle : *Sartor Resartus*, p. 198.
- 14) Carlyle : *On Heroes, Hero-Worship, and the Heroic in History*, p. 12, p. 196.
- 15) *F. R.*, I, 12.
- 16) *F. R.*, I, 180.
- 17) Charles Frederick Harrold : "Carlyle's General Method in *The French Revolution*," *PMLA*, (1928), XLIII, 1151—52.
- 18) Emery Neff : *Carlyle* (London, 1932), p. 177.
- 19) James Anthony Froude : *Thomas Carlyle: A History of the First Forty Years of his Life* (London, 1882), II, 2.
- 20) Froude : *Thomas Carlyle: A History of his Life in London* (London, 1885), II, 450.
- 21) *F. R.*, I, 19.
- 22) *F. R.*, I, 20.
- 23) *F. R.*, I, 22.
- 24) マルクス、エンゲルス共著『共産党宣言』リヤザノフ注解，早川二郎訳。(ナウカ社，1946)，p. 148.
- 25) *F. R.*, I, 24.
- 26) *F. R.*, I, 25.
- 27) *F. R.*, I, 26. (第4章の最後)
- 28) *F. R.*, I, 20.
- 29) *F. R.*, I, 23.

